

〈本論第二回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1411～1423 ドナテルロによる、オルサンミケーレ教会（麻織物ギルドの教会）の壁龕彫刻群製作
- 1424 ロレンツォ・ギベルティ（1381～1455）サン・ジョヴァンニ洗礼堂の最初の門扉装飾レリーフを完成（大商人ギルドの依頼）
- 1425～マザッチョ（1401～1428）による、サンタ・マリア・デル・カルミネ大聖堂内部のブランカッチ礼拝堂フレスコ画制作開始（途中で放棄）、ブランカッチ家は絹商人でこの聖堂の有力パトロン
- 1431 シギスモンド・マラテスタ（1417～1468）リミニの専制君主になる（15歳、二年前に傭兵隊長としてデビュー）
- 1434 フィリッポ・ブルネレスキ（1377～1446）による、フィレンツェ大聖堂（サンタ・マリア・デル・フィオーレ）の丸屋根（クッポラ）完成、頂上部ランタンはブルネレスキの設計により、死後完成
- 1439 コジモ・デ・メディチ（1389～1464）の主導で、フィレンツェ公会議（カトリック、東方教会合同）開催 コジモのフィレンツェ実権掌握の結果
- 1444 フェデリーゴ・ダ・モンテフェルトロ（1422～82）、ウルビーノ公国を継承。彼は庶出であり、嫡子の義兄は悪政により暗殺された。その後を継ぐ。歴戦の傭兵隊長であり、人文主義的パトロンとして著名であった（ブルクハルト参照）
- 1449 ロレンツォ・デ・メディチ誕生（～1492）
- 1450 この頃、レオン・バティスタ・アルベルティ（1406～1472）により、リミニのテンピオ・マラテスティアーノ完成 ゴシック期の教会をマラテスタを讃える個人神化の神殿に改築したもの（ルネサンス的古典礼賛の極致）
- 1452 レオナルド・ダ・ヴィンチ誕生（～1519）
- 1452～58 ピエロ・デラ・フランチェスカによる、アレッツォの聖フランチェスコ聖堂フレスコ連作〈聖十字架伝説〉製作
- 1460 法皇ピウス二世、マラテスタを欠席裁判で破門
- 1462 フィレンツェのプラトン・アカデミー創設 学長格はマルシーリオ・フィチーノ（1433～1499）プラトン全集、ヘルメティカ（ヘルメス文書）のラテン訳を進める

- 1469 ロレンツォ（イル・マニフィコ）の成人を祝して馬上槍試合が開催される
（→ボッティチェリ、ワールブルク）、同年、ロレンツォはフィレンツェの
実権を握る
- 1475 ミケランジェロ・ブオナロティ誕生（～1564）
- 1476 ルドヴィーコ・スフォルツァ（イル・モーロ 1452～1508）ミラ
ノの実権を篡奪
- 1477～78 サンドロ・ボッティチェリ（1444頃～1510）による大型
テンペラ画〈プリマヴェーラ〉（春）完成
- 1483 ラファエロ・サンティ誕生（～1520）
- 1485 ボッティチェリ〈ヴェヌスの誕生〉完成
- 1486 ピーコ・デッラ・ミランドラ（1463～1494）の『人間の尊厳につ
いて』
- 1494～1497 フェラーラのドメニコ会士ジロラモ・サヴォナローラ（145
2～1498）によるフィレンツェ神権政治 過激な説教により「墮落」
した多くの世俗的芸術作品が破壊された（宗教改革におけるイコノクラ
スムの先駆）サヴォナローラは反対派の暴徒によって処刑された
- 1495～1498 レオナルド、〈最後の晩餐〉製作（ミラノのサンタ・マリア・
デッレ・グラーツィエ教会フレスコ壁画）
- 1536～1541 ミケランジェロ〈最後の審判〉製作（ユリウス二世の天井画依
頼は1508年に遡る）
- 1537 コジモー一世（メディチ傍系）トスカーナ公に、中央集権を進める
- 1559 コジモー一世、シエナ併合
- 1569：トスカーナ大公国の成立（～1860）＝ルネサンス的都市国家の終焉

2. 近代開始の自己矛盾 → 古典古代の再生、復興としての近代開幕

- 維新的復古とのパラレル？ → 定位内実の弁別に注意すること
- むしろ対極的（古学的専制志向は個我の覚醒を抑圧する）
- ルネサンスにおいて古典古代の価値を再発見したのは近代的個我
- これが真の近代の前提となる（→これは江戸期幕末にもパラレルの現象が）

3. 近代開始の基本定位構造

- 個我のアトム化 → 中世的共同性、規範からの離脱
- アトム化の前提は機械情報革命の準備段階としての近世マニファクチュ
ア（+流通と商業資本の拡充）
- 内的自由の覚醒（自由の不安、恣意性、傾向性への転落の危険）
- 〈人間〉の発見
- 〈世界〉の発見
- 〈人文主義〉を媒介としての〈文化共同体〉の構築

→ 秘教的サークルへ（革命の時代においては陰謀的秘結社の心象へ転落）

4. ルネサンス的個我の範疇

- ① 芸術家：ギベルティ、ドナテルロ、ブルネレスキ、ボッティチェリ、レオナルド、ラファエロ、ミケランジェロ等々綺羅星の如き天才たち
 - 天才の原義は〈創意工夫における新しさ〉
 - 〈神のごとき〉という枕詞の定着（ヴァザーリ等）
 - ギルド的規範からの自己解放
 - 新しいテーマ、システムの開拓 → 遠近法の例 → デカルト座標の前哨
- ② 傭兵隊長：モンテフェルトロ、マラテスタを代表とする
 - 小邦の専制君主 → 芸術家のパトロンへ
- ③ 篡奪者：ルドヴィーコ・スフォルツァを代表とする
 - 公国クラスの専制君主 → 芸術家の大パトロンへ

5. ルネサンス的個我における芸術家とパトロンの相互是認

- 旧来の共同体からは社会的是認が得られにくい新しい才能群
- その活発な交流により、国民文化の先駆型が形成されていく

6. ルネサンス的人文主義 → 国民文化の祖型形成の意義

- 国民国家成立期にルネサンスへの関心が広がる
- その関心はブルクハルトの古典的研究（『イタリア・ルネサンスの文化』1860年）に結実

7. 近代的文化史、文化学確立者としてのヤーコプ・ブルクハルト（1818～97）

- 歴史の三つの潜性力（ポテンツ）としての、国家、宗教、文化
- 基底的な定位主体としての〈悩み、行動する人間〉
- ヘーゲルの〈世界史〉パラダイム、進歩史観の抽象性に対する異議
- 専門研究ではなく、むしろ〈予備学^{プロベドイティーク}〉としての歴史の意義（定位哲学も同じ範疇）
- ニーチェのギリシア古典研究（『悲劇の誕生』）の評価へ

8. ブルクハルトを代表とする文化史研究の隆盛

- 文化共同体としての国民国家の成立と連動
- しかしそれはまた国家の境界を越えて拡大していく
- ヨーロッパ的人文性の覚醒へ ⇔ ヘーゲルモデルにおけるヨーロッパ的ジ
ンゴイズム＝ヨーロッパ国体論
- 普遍的人文性を中心とする文化共同体
- 近代文明の核心部における人間性の確認

- その祖型としてのイタリア・ルネサンスの「文化」
- 教養旅行としてのイタリア旅行の定型化（ゲーテ父子等）
- 国民国家としてのイタリアの共同性を準備
- 自らの古典的過去の礼賛（引用1）
- 教会と小邦国家の専制抑圧 → 秘教的共同性への転形（ネオ・プラトニズム、ヘルメティズム）

引用1

〈われわれは、古典古代の再生だけではなく、それとならんで存在していたイタリアの民族精神とこの再生運動が密接に連携して、ヨーロッパ世界を制覇していったのだと主張したい。これが本書の最重要の命題でもある。……つまり、おなじ民族の、遠く隔たった二つの文化時期の融合は（※ラテン世界とイタリア・ルネサンス世界の融合は）、それ自体きわめて高度の独自性を有するがゆえに、正当で、そして豊穡な、そういう融合たりうるのである。〉（『イタリア・ルネサンスの文化』第三部〈古代の復活〉、試訳、230p）

9. ルネサンス的個我の覚醒（引用2）

- 「作品としての国家」の登場
- 国家の人為的創出の観念が芽生えたのが、ちょうどこの時期である
- 代表は傭兵隊長と篡奪者
- フェデリーゴ・ダ・モンテフェルトロ（1422～82）：ラファエロの故郷ウルビーノ公国の人文的名君
- シギスモンド・マラテスタ（1417～68）：リミニの専制君主、法皇と争って破門された
- ルドヴィーコ・スフォルツァ（1452～1508）：ミラノ公国の篡奪者、レオナルドのパトロン
- 芸術家と専制君主たちの紐帯
- 〈社会的是認〉が欠如した両者の、相互是認が新しい紐帯を生む
- 近代的文化主体の覚醒へ
- フィレンツェの特異な位置
- 中世的都市国家だがその政体は著しく不安定
- すでにダンテ（1265～1321）の時点でそうだった = 皇帝派と教皇派の相克
- 近代的政情、および〈政体の様々な実験〉を先取り
- マキャベリ『君主論』（1532年）へ収斂 → 近代国家論の先駆けに

引用2

〈中世においては、人間の意識の両面性、つまり外界へ向かう関心と、内面の人間自身にむかう反省とは、一枚の共通のヴェールにおおわれていた。そこで夢見ているか、まどろんでいる、そういう状態だったのである。そのヴェールは、信仰と、子供っぽい偏執、そして妄想から織りなされていた。それを通して世界と歴史を見ると、ふしぎな色合いに染まって見えたのである。内面性とはいうと、中世人は自己を、種族、国民、党派、団体、家族の一員として、あるいはそのほかのなんらかの一般的な形式においてのみ、認識していた。

イタリアではじめて、このヴェールが突風によって吹き払われる。国家およびこの世のあらゆる事物一般の客観的な考察と操作意志が目覚める。さらにまた、それとならんで、主観的なものも、ちからいっぱい立ち上がる。人間は精神的な意味における個人となり、自己を個人として認識する。〉(同上、第二部〈個人の発展〉、194p)

- 10. ルネサンス的自己解放 → 定位の普遍構造化への進展
 - ⇔ 江戸的個我の解放 → 刹那主義への転落がしばしば見られた(西鶴、平賀源内等)
 - 定位構造化は希薄
 - ⇔ 江戸的定位の近代性は、むしろ学的営為において、潜行的に行われた
 - 心学の例(石田梅岩等)
 - 蘭学の例(杉田玄白、福沢諭吉等)
 - 福沢の自己解放は小藩の因襲からの自己解放であり、それはアトム性ではなく、デラシネ化を生んだ(いまだ構造化の原理ではないことに注意)

- 11. ルネサンス的自己解放の自己破壊的側面
 - 定位の基軸を失った人文学者の不幸(引用3)
 - バランスを取ることに成功した人文学者の清貧(引用4)
 - 一見すると中世的モラルへの復帰に見える(レーヴィットの解釈)
 - しかしそれは主体的選択であることによって、十分にルネサンス的である(引用5)
 - ブルクハルトにおける人文的清貧 → ベルリンでの成功を求めず

引用3

〈古典古代はかれらの倫理を乱すのみで、古典古代自体のエートスをかれらに伝えるわけではなかった。その古代において信仰されていた神々をあらたに信仰することは、さすがに問題とならなかったのも、古代はおもに、懐疑的、否定的な側面からかれらに影響をあたえた。かれらが古典古代を絶対的なものとして、つまり一切の思考と行動の規範として把握したので、倫理という面では、かえって不利な結果となった。……

人文学者は、精魂をすりへらす、有為転変の生活に落ち込んでいった。そこでは、無理な勉強、家庭教師の苦勞、秘書役、大学教授のポスト、君主への宮仕え、命にもかかわる敵対の危険、驚嘆、感激と、雨のようにふりそそぐ嘲笑、贅沢と貧困、それらがめまぐるしくつづいた。……

傲岸な心なしには、このような性格は支えられない。かれらは、人の上を泳ぎ回るためだけでも、すでにそのような心を必要とする。そして憎悪に急変する崇拜も、必然的にかれらの傲岸を強める。つまりかれらは、解き放たれた主観性の、そのもっとも顕著な実例であり、犠牲である。〉(同上、〈十六世紀における人文主義の没落〉、試訳、322p)

引用4

〈この修道士と人文学者たちとの違いは、なんだったのだろうか。人文学者たちには、自分の幸福に活用しうる以上の、自由意志と解き放たれた主観性がある。これに反して、この托鉢修道士は、少年のころから修道院で暮らし、食事や睡眠すら一度も自分の思いのままに楽しんだことはなく、そのため、強制をもはや強制と感じなくなっていた。この習慣のおかげで、どんな苦難にあっても、内面的にきわめて平安にみちた生活を送り、得意とするギリシア語よりも、むしろこの穏やかな印象で、聴講者に感化をおよぼした。〉

(同上)

引用5

〈欠乏と労苦のさなかにあっても、この人は幸福であった。それはこの人が幸福になろうと欲したからである。〉

(同上、324p、ブルクハルトによる引用)

1.2. ルネサンス期の〈人望〉、〈評判〉と初期メディア

- 人文サークルの活発な情報交換が基礎 → 相互是認と頹落は紙一重
- SNS 的問題の先取りも
- サークルの基本的な狭さと閉鎖性
- 第三者的チェック機構の欠如
- それにもかかわらず、近代文化の祖型はルネサンス人文主義によって造型された

1.3. ルネサンス的人文主義の秘教サークル化 (オカルティズム化)

- 歴史的な大前提は、中世教会と反宗教改革という宗教的強権による抑圧
 - = 二つの強権抑圧の〈風〉としてのルネサンス運動
 - 小邦への分裂が強権の範囲、強度を阻害
 - 個我の自由度にとってプラスに働いた
- 強権抑圧の再来 → ルネサンス的人文性の非・公式化 = 秘教化
- バフチンの文化二元論の史的な前提 (公式文化⇄非・公式文化)

- しかしルネサンス人文主義の秘教化は、人文主義そのものにも内在していた
- ヘルメティズムの流行 → 哲学的秘教の前提
(コジモ・デ・メディチ、フィチーノ、ピーコが初期の代表者)

14. 定位のオカルティズム化、秘教化

- 個我と強権の弁証法から普遍的に発生する(〈叙情的オカルティズム〉の現象)
- 江戸期における言語文化の二重化 → 公式の漢学と非公式、民衆的な俳諧狂歌
- 禅学や剣道における師資相承の型 → 顕密への分岐が見られる
- 江戸強権による蘭学の抑圧(蛮社の獄、安政の大獄)
- 攘夷論の抑圧が追加される
- 蘭学、洋学の〈秘密結社〉化(福沢 引用6)

引用6

〈当時は(※幕末維新期は)洋学社会の人数甚多からず。其互に懇親なるは一種の秘密結社に等しく、他人に言ふ可らざる事柄にても、互に打明けて語るの常にして、是れは今人の(※明治に入ってからの人間の)知らざる所なり。〉(福沢諭吉『福沢全集緒言』、選集12巻、148p)

15. 秘教的共同性の文体論：ルネサンス・オカルティズム → アレゴリーへの傾斜

- エドガー・ヴィントの古典的研究の前提
- 〈三美神〉のトポスの流行 → ボッティチェリの〈春〉による完成

16. 〈三美神〉の系譜

- カリタス = 優美(ギリシア神話)
- 周縁神のアレゴリー化は古く、すでにホメロスに定型が見られる
- グラーツィアエ = 優美の三美神(ローマ神話)
 - ヴェヌス、アポロ等に属性として付属的、説明的に登場
 - これがルネサンスにおける〈三美神〉アレゴリーの前提となる

17. ルネサンス研究とアレゴリー研究の近親性 → 図像学(イコノロジー)の展開

- 研究の基軸を創始したのはアビィ・ワールブルク(1866~1929)
- ハンブルクのワールブルク研究所が図像学研究のメッカとなる
- 戦前にイギリスに移転亡命(1933年) → ロンドン大学の附属研究所に
- ヴィント、ゴンブリッヒ、パノフスキたちの研究の拠点として活用される

18. 〈三美神〉アレゴリーによるルネサンス的定位

- 異教とキリスト教の対立を媒介し、平衡モデルを構築
- 〈三美神〉は〈三位一体〉のシンタクスと重合する

→ 非常にきわどい均衡

19. ワールブルク学派の欠落 = 記号学的な解析の欠落

- しかし本来、アレゴリーも図像解釈も記号現象である
- 図像とテキストの意味論的結合を本能的に前提とする傾向
- アレゴリー本来の自由度を失い、〈エンブレマタ〉(記章一覧)に接近
- 学派の周縁にいたエルンスト・カッシーラー(1874~1945)の〈象徴論〉(『象徴形式の哲学』1923~29)にもこの欠落は見られる
- 象徴を実体的に捉えることで、象徴とアレゴリーの弁別も不可能になる

20. アレゴリー現象への再度の接近 → 二つの新たな方法の可能性

①内在的方法

- 〈時代精神〉からの〈寓意〉の理解(ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』、『パサーージュ論』等)

②記号学的(外在的)方法

- アレゴリーにおける能記(意味するもの)と所記(意味されるもの)の独特の結合状態、乖離状態に着目して、象徴論、エンブレマタをあわせた、〈比喩〉現象の一般化をはかる(本論考の立場)
- この方法の利点は、日本の短詩における定型化の修辞現象も統一的に理解できることにある
- 文体の共根性を近代的定位全体に位置づけること

21. アレゴリーと象徴の対比の記号学的解釈

- アレゴリーは能記と所記の乖離が起きやすい(天秤を正義の平衡のアレゴリーとする場合 → 天秤そのものには正義の意味性は内在しない → 結合は外挿的、事後的であることがわかる)
- 象徴はこの結合が固く、乖離は普通起きない(鳩と平和 **etc.** → 鳩の〈平和な表情〉との重合 → 一般的了解が前提 → したがって結合は自然に見え乖離が置きにくい)
- エンブレム(記章)は能記所記の結合形態はアレゴリー類似するが、この乖離がやはり起きない(ほとんど起きない) → その根拠は?

22. 〈ヒエログリフ〉(象形文字)のルネサンス的流行

- アレゴリー、象徴、エンブレムのすべての要素を含む
- 解析による三範疇の弁別が可能かもしれない
- 創作象形文字は自由な記章として活用された

23. アルベルティの自由記章(ヒエログリフ)

- 知恵の眼、飛翔の翼の組み合わせ
- 寓意か象徴か、それとも一義的記章（エンブレマタ登録用）か

24. 象徴法の記号学的原理

- 象徴の前提は能記と所記の自由な、しかし固い結合である。
- 一般的了解（能記、所記の）を前提とする
- しかし記号現象の根本は能記と所記の〈恣意的な結合〉（ソシユール）であり、記号現象一般を象徴形式（有意味的形式）だとするカッシーラーの立論には無理がある
- 象徴においては結合の動因である（意味と形式の結合の動因）〈実念化〉が一時的に完了している
- したがって能記と所記の範囲はびたりと重なりあい、結合において恣意的解釈を生じる可能性のある〈余白〉（意味性に包括されない能記の余白）が存在しない
- 一義的了解の根拠はここにある

25. 寓意（アレゴリー）の記号学的原理

- 能記は部分表象（天秤、剣、楯等）
- 所記は全体表象であり、範囲が広いだけでなく、曖昧
- 所記の段階での恣意性 → 意味範囲の伸縮は原理的に無拘束、自由自在
- 意味づけの恣意性の発生 → 遊びとしての寓意、自由記章（紋章）
- 教養、文化共同体を母胎とする意味了解の共有（引用7）
- 寓意の一義的理解 = 寓意のエンブレム（記章）化
- この謎解きの遊びにおいては、いまだ〈秘教〉は存在していない
- **ex libris (libri)**（蔵書票）の流行
 - = 人格の象徴としての図像選択 → ワールブルク

引用7

〈古代人は神をあらゆるものをくまなく見通す目に喩えた。かくてわれわれは、神とはつねに存在し、われわれの行為や思考すべてを見通すお方であることに気付く。あわせてわれわれは、目配りをわすれず、慎重でなければならない。そのことをあらためて思い知らされるのである。〉（『ルネサンスの異教秘儀』、〈隠れたる神〉194p）

26. 哲学的秘教の源泉

- 寓意、象徴ではなく、〈神話〉の共有から始まった
- オルフェウス教 → ソクラテス → プラトンへ（〈洞窟の神話〉、〈エルの神話〉等）
- プラトニズムは概念の沈黙において、〈神話物語〉へと変容する

- この変容の本質は〈ミメシス〉(所作) → 〈物語〉の定位哲学にとっての中核的意味 → 賢治的ファンタジーを包む、アニミズム的秘教性(〈叙情的オカルティズム〉)の例

27. ルネサンス的秘教の中核部で起こったこと

- 〈三美神〉と〈三位一体〉の等置
- 聖書解釈における〈原・アレゴリー〉
- アンブロジーウス、アウグスティヌス

28. アウグスティヌスの寓意論

- 古典修辞学の教師として、聖書の物語を素朴すぎると感じる
- アンブロジーウスの寓意解釈によって、その〈神の寓意〉の次元に覚醒する(引用8)
- 〈文字は殺し、霊は生かす〉
- 全体的所記としての神は場所を持たない(能記を持たない)
- 無からの世界創造(クレアチオ・エクス・ニヒロ)
- 救済史は〈神の国〉のアレゴリーとなる
- 意味づけの〈恩寵〉性
- 人間の恣意性を超越する原・意味の開示(引用9)

引用8

〈彼は文字どおりにとればよこしまなことを教えているように見えるところを、その神秘のおおいをとりさり、霊的な意味を開示してくれました。〉(アウグスティヌス『告白』第六卷第四章、山田晶訳、194p)

引用9

〈あなたは……あらゆる場所に全体としてましましながら、しかもいかなる特定の場所にもましまさない。あなたはけっしてこのような物的形態ではないが、しかも人間をあなたの似姿に造りたもうた。しかし、どうです。その造られた人間は、頭の頂きから足の先まで、場所のうちに限定されているのです。〉(同上、第六卷第三章、192p)

29. ルネサンスの哲学的秘教 → アウグスティヌス的原・アレゴリーの再生

- しかしそれは超越神ではなく、世界内的〈三美神〉上の三位一体だった
- キリスト教中世と古典古代のきわどい均衡
- 場所を超越した創造神と場所の神である〈三美神〉との調停
- 〈対立物の調和〉(ディスコルディア・コンコルス)の理念へ

- 祖型は古典古代末期の哲学秘教であるヘルメティズム
- マクロの崩壊期に起こる神々と定位の大規模な習合
- 原始キリスト教とプラトニズムの習合もその一場面(=キリスト教最大の神学者としてのアウグスティヌスもその一人) → ニーチェのキリスト教批判へ(〈背後世界論者〉)

30. 日本の定位における中世と近世の調停、均衡

- 顕密の伝統上では構造化はおきていない
- 唯一、同じような平衡の試みは花鳥の伝統において見られる
- 短詩(長歌、和歌、連歌、俳諧)における、定型修辭の増殖と自己組織化
- 〈本歌取り〉に見られる詩世界の象徴化、ネットワーク化
- 枕詞、序詞、〈歌枕〉、および勅撰集、私家集における〈部立て〉のトポス化
- 〈四季〉の部立て → 〈季語〉の定型システム化へ

31. 日本の花鳥における〈季語〉定型 → 自然の寓意化

- 了解の母胎は〈同好の士〉=花鳥共同体
- 定型と革新 → 〈見つけどころ〉の競い合い
- 蕉門俳諧 → ルネサンス的ヒエログリフとの構造的共通性
- 文化文政期の俳諧、狂歌 → バロック的寓意詩人、エンブレマタのシステム化に似る
 - 〈こりすぎ〉と〈楽屋落ち〉に退行した花鳥共同体の現実
 - これもバロック期の特に劇作家の通弊だった(ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』)
- 近代文体の選択は、近代的個我的定位選択の徴表となる

32. ルネサンス的共同性と日本の花鳥の共振

- 〈古代的平準化〉のモメント
- ルネサンスの場合は〈古典古代の市民の平準性〉への自己同化
- 花鳥共同体の場合は、平安花鳥における〈円居のあそび〉が範例的
- 平安花鳥は貴種流離的なアウトサイダーから始まった(『伊勢物語』における在原業平)
- 歌人の無階級制の理念を生む(敬語の省略、命令文の編入)
- 古代的平準化の共同性理念へ
- 〈みやび〉の理念として定着
- その場合の〈宮廷風〉とは、この階級無化を最初に始めたのが宮廷文化だからである
 - (⇔宣長、日本浪漫派の宮闕偏執の誤解 → 権威主義への退行 = 非・花鳥)
- 原アニミズムの審美的転生

→ 四大への信仰は、〈写生〉の理念へと変容 → 偶有的自然への信頼と讃美

3 3. 日本的花鳥の真の淵源 → 人麻呂歌謡の二重性

→ 宮廷詩人としての表顔（公式文化としての花鳥）

→ 民謡歌謡の模索詩人（『人麻呂家集』）、私的挽歌の詩人（非・公式文化であった花鳥）

→ この二つの方向を再度統合したのが平安花鳥である

→ その場合の基体は、非・公式的無階級制の制度的是認であった（勅撰集の伝統）

→ 選者は階級ではなく歌人としての実力で選ばれる

3 4. 江戸国学における〈王土〉は、花鳥的平準性をすべて無視する

→ 日本花鳥の無化に等しい

→ ペダンティックな権威主義的註釈の体系へ

→ 国学的国体論の胎動

3 5. 〈古代的平準化〉の抑圧も、ルネサンスと日本花鳥でパラレルな現象

→ ルネサンス的平準性 → 宗教改革、反宗教改革による抑圧、弾圧

→ 日本花鳥的〈円居〉の無階級制

→ 権威主義的国学そしてそこから派生する形で、隠微な形式の抑圧

→ 一部は専制体制翼賛的に活用される

3 6. 近代における教養世界と文化共同体の定位機能

→ 国民的融合を媒介

→ 非・公式文化による〈隠れた共同性〉（抒情的オカルティズム）の存続

→ 東西における共根性、共構造性が確認できる。

→ 文化史と人文主義の本質的連関は今現在も持続している（本論考の基本的な企図もその文脈上にある）

（本論第二回キーワード終わり）